

ローカルな歴史とナショナルな歴史 歴史認識としての特攻 Local History and National History Historical Recognition about Kamikaze

◎佐藤 信吾¹
Shingo SATO

¹慶應義塾大学社会学研究科修士課程

Master program in Human Relations, Graduate School, Keio University

要旨…本研究は「特攻の聖地」として知られる知覧と、マス・メディアとの相互の関係性を分析する。マス・メディアやオーディエンスは、知覧特攻平和会館（以下、平和会館）がリアルな戦跡であることを期待しつつも、知覧の特攻という特殊性を超えて、航空特攻の全てを概観できる地であることを望んでいる。一方で、平和会館自身は、それらの期待に応えるように振舞っていると見ることが出来る。その結果として、平和会館は「特攻博物館」のような様相を呈しており、戦跡としての知覧の「固有性」、「真正性」を喪失する傾向にある。本研究では、平和会館を中心とする知覧の戦跡が、その「固有性」や「真正性」の喪失を批判するだけでなく、マス・メディアの視点から分析することによって、平和会館がマス・メディアにとっての「基準」となるとともに、航空特攻の歴史のリソースを独占していく様子を明らかにしていく。

キーワード ローカル・メディア, 特攻, 知覧, メディア巡礼

1. はじめに

「ジャーナリズムは、現代社会における記録と想起の主要機関の一つとして引き続き機能しているので、どうやって想起され、なぜそのような形で想起がなされたのかを理解するために、私たちはより多くの労力を割かなければならない (Zelizer 2008: 85)」という指摘からも分かるように、ジャーナリズムが過去をいかにして想起させるか、どのような過去を提示するかを明らかにする研究が盛んになってきている。そういった中で、マス・メディアが過去の出来事を論じる場合に、体験者の証言などと並んで、歴史的に重要な史跡（戦争体験の場合は戦跡）が参照されることが多い。

本研究では、マス・メディアやオーディエンスが戦跡にある種の期待をもち、その期待に戦跡の側が応じることによって、戦跡がどのように変容していくのかを明らかにする。対象は、鹿児島県南九州市に位置する知覧と知覧特攻平和会館（以下、平和会館）とする。マス・メディアと戦跡の相互の関係性を明らかにする研究に、特攻、および知覧を対象に選んだ理由としては、以下のポイントが挙げられる。

まず、特攻はその他の歴史的出来事と比較して、証言が得にくい性質がある。特攻は、作戦の成功が死を意味するため、従事した隊員の多くが生き残ることが出来ない。辛うじて生き残ったとしても、特攻体験は「消し去れない深い傷跡 (佐藤 2007: 238)」として刻み込まれており、生き残った隊員は「特攻ずれ」などと世間から揶揄される状況であったことを考えると、証言を残すことは困難であったといえる。とりわけ、実際に出撃した隊員の証言はかなり少ない。

その一方で、特攻は軍事作戦であることから、出撃が決まってから、実際に出撃するまでにはある程度の時間が残されていた。そのため、遺書や遺品、手紙などはかなりの数が残されている。マス・メディアもそれらを手がかりにして報道を行っていくという傾向が見られる。すなわち、他の戦争体験と比較しても、遺書や手紙などの価値が相対的に高くなると考えることが出来る。

以上の点から、遺書や遺品を取りそろえ、数少ない証言を収集している特攻の戦跡は、他の戦跡と比較しても、分析の重要性が高く、マス・メディアとの関係性も深いといえるのではないかと。特攻戦跡の中でも、とくに知名度の高い知覧を、本研究では分析対象とする。

大刀洗陸軍飛行学校知覧分教所は、1941年12月に開校した。分教所は、45年からは決死の作戦である航空特攻の基地として使用された。太平洋戦争後、1955年に特攻平和観音堂が、1975年には後の知覧特攻平和会館（以下、平和会館）の前身である特攻遺品館が設置されるなど、特攻隊の慰霊・顕彰地、観光地として知られており¹、多数の来場者を集めている。例えば、平和教育の一環として、修学旅行なども多数受け入れており、小学校・中学校・高等学校を合わせて毎年500校強、4000人以上が見学を行っている²。他の特攻戦跡である、鹿屋、万世などと比べても、観光地としての知名度は圧倒的である。それゆえに、知覧は「特攻の聖地」として知られ、マス・メディア上でもたびたび言及される存在となっている。

2. 先行研究の整理

知覧に関する研究は、大きく二つの潮流に分けることが出来る。一方は、戦中戦後において知覧の街で起こったことを、ノンフィクションの形式で記述していく研究（①）であり、もう一方は、知覧を戦跡として捉え、そのメディア性や、様々なコンテンツにおける知覧の描かれ方を分析した社会学的な研究（②）である。以下、双方の主要な研究を概観する。

①：知覧と特攻を結び付けるうえで重要な作品として、高木俊朗の『知覧』（1965）が挙げられる。同書は戦中に陸軍報道班員として知覧に赴いた筆者が、戦後に再度訪問し、知覧飛行場と所縁のある人々に行ったインタビューなどをまとめたものであり、「高木俊朗の一連の作品などで知覧の名は広く知られるようになっていく³」という評価からも分かるように、知覧を世に広めるきっかけとなる作品である。この他にも、佐藤早苗の『特攻の町 知覧』（2007）では、戦後50年以上が経った後に、知覧をキーワードにして、特攻がいかに行われたのかを探求している。あまり人口に膾炙していない「振武寮」の存在や、特攻作戦を指揮した司令官である菅原道大などにも言及しながら、様々な視点から特攻や知覧の戦中・戦後史を明らかにしようとしている。このように、知覧は特攻の歴史をノンフィクション形式で記述していく研究に使われることが少なくない。こういった作品は、基本的にノンフィクションライターや記者によって執筆される傾向にある。

②：知覧を社会学的に分析する試みは、福間良明らによって行われてきた。とりわけ、知覧という戦跡（メディア）がどのように形成されてきたかに焦点を当てた研究と、メディア・コンテンツにおける知覧の描かれ方に焦点を当てた研究の二つに大別することが出来る。福間は、戦後において「さまざまな体験のなかで、知覧では『特攻』への感情移入の記憶が選り取られた（福間2015：227）」としたうえで、知覧における特攻の記憶は、先述の高木の『知覧』などの影響を受けながら、変容していったことを示している。また山本昭宏は、1980年代以降の知覧町が「平和」を街のコンセプトとすることで、「思想信条の違いや、戦争への理解をめぐる対立を包み込み、その違いや対立を見えなく（山本2015：97）」しており、特攻を観光資源として利用する道を開いたと分析している。このように、戦後の知覧は街としてのアイデンティティを特攻に定め、その他の記憶や体験を忘却することで、「特攻の聖地」となっていったことを、これらの研究では明らかにしている。

もう一方では、様々なメディア・コンテンツの中で描かれた知覧の表象を分析する研究も行われている。例えば、様々な「コンビニマンガ」における知覧の描かれ方を分析した吉村和真は、「地理や歴史に関する情報よりも、『死を覚悟した者の覚悟や愛情』といった人間の気持ちらが前景化する場所（吉村2015：321-322）」として知覧が使用されていると述べた。また、井上義和は「自己啓発本」における知覧の存在に言及し、知覧に巡礼することによって、自らの生活を顧み、活を入れてもらうことが出来るという論理が形成されているとした（井上2015, 2017）。この状況を、井上は「記憶の継承」から「遺志の継承」へと定義づけ、「歴史認識の脱文脈化によって、特攻死が浄化・純化されて『美しいもの』としてポジティブに受容される（井上2017：43）」ことを指摘している。ただし、こういった「自己啓発」的な特攻受容を、「記憶の継承」から「遺志の継承」へと述べている井上に対しては、「ステレオタイプな二項対立（蘭2017：59）」との批判もある。これらの研究では、様々なメディア・コンテンツに知覧の表象が使用されることで、単純な場所ではなく、一定の意味を持った存在となっていることを明らかにしている。

このように、知覧を題材にした研究が積み上げられている。その中で、これまでの知覧研究、戦跡研究の問題点の一つとして、戦跡を対象とした研究と、マス・メディアにおける戦跡の描かれ方を分析する研究とが分かれて行われてきたことが挙げられる。本研究ではマス・メディアやオーディエンスが、「知覧」にどのようなまなざしを向けており、それに対して「知覧」の中心的な行為主体である平和会館が、どのようなリアクションを取っているかを分析することで、マス・メディアと戦跡と

¹ 本論の知覧についての年号や名称は、『魂魄の記録』による。

² 福田成孝知覧特攻平和会館館長へのインタビューより。2017年7月6日13:00～15:00、知覧特攻平和会館にて。

³ 産経新聞、2001年5月27日、朝刊。

の相互関係を明らかにすることを目指す。

3.二つの「知覧」—マス・メディアにおける「知覧」の意味—

マス・メディアにおける知覧の描かれ方を分析する前に、知覧の現在の状況を確認する。1945年8月15日に終戦を迎えた知覧の飛行場跡は、「すぐに旧地主や開拓者に払い下げられ、茶畑に戻された（福間 2015：197）」。

その後、高木の『知覧』、「特攻の母」として知られる鳥濱トメ（富屋旅館の女将）の存在などによって注目が集まるにつれて、「知覧＝特攻」の構図が前景化してきた。すなわち、「かつては茶畑でしかなかった地は、メディアや戦友会の動きと重なりながら、特攻の『聖域』と化していった（福間,山口 2015：13）」のである。現在の知覧の戦跡は、戦時中の特攻の記憶を脈々と受け継いできたというよりも、戦後に無視されたものが、観光地化という文脈において再発見されたと見ることが出来る。加えて、その象徴として整備された平和会館は、知覧と直接繋がりのある特攻体験だけでなく、航空特攻に関する様々な出来事を扱う、「特攻博物館」の様相を呈している（第4章にて詳述）。つまり、「1945年の知覧」（特攻が行われた当時の知覧町とその周辺）と、「現在の知覧」とを同一線上に考えることは難しい。しかし、マス・メディア上では、この二つの「知覧」が連続的に描かれている。以下、その様相を概観する。

朝日新聞（2007年2月26日朝刊）の記事の前半部では、安倍晋三内閣総理大臣の著書『美しい国へ』に登場する鷲尾克己と、『きけわだつみのこえ』に登場する上原良司という二人の特攻隊員のストーリーが列記されている。二人とも知覧から沖縄に特攻を行って戦死した隊員であり、二人が民主主義の世界を夢見て悩みながら特攻に従事した話が綴られている（「1945年の知覧」）。後半部では「『知覧特攻平和会館』を訪ねると、出撃した1036人の特攻隊員の遺影の前で立ちすくんでしまう。彼らは、どんな思いで死と向き合ったのだろうか」と、実際の知覧に行くことと彼らの真情が理解できるという構図になっている。

産経新聞（2015年6月14日朝刊）でも、前半で知覧から飛び立った特攻隊員たちが、「開聞岳を見ながら海岸線を越えると『もう戻れない、行くしかない』と、何度も何度も振り返りながら覚悟を決めた」というエピソードが語られている（「1945年の知覧」）。そして、後半では特攻隊員の遺書や史料を多数所有する知覧が、ユネスコの世界遺産への登録を目指す話から、「よく晴れた日、ヘリコプターで特攻機と同じ経路を飛んだ。特攻隊員を見送り続けた美しい開聞岳を見ながら洋上に出ると、吸い込まれそうな真っ青な海が一面に広がった」という記者の感想が書かれて、締めくくられている。

NHK（2015年2月14日放送）の「目撃！日本列島『特攻 歪められた戦果～元兵士 戦後70年の証言～』」では、現在の知覧と平和会館が紹介された直後に、昭和20年（1945年）4月22日の白黒映像とともに知覧から出撃する特攻機が描き出される。このドキュメンタリーは、特攻の戦果が水増しされたり改竄されていたことを生き残った隊員たちの証言を交えながら明らかにする内容であり、その前段階として現在の知覧と1945年の知覧が語られている。

このように、各マス・メディアの政治的主張や媒体などに関わらず、特攻を論じる場合には平和会館を中心とした「現在の知覧」と「1945年の知覧」が組み合わせられて論じられる。つまりマス・メディアは、「現在の知覧」が「1945年の知覧」の面影を残し続けていることを期待しているといえる。その結果、「現在の知覧」は1945年の特攻基地を今に残す存在、言い換えれば知覧で行われた特攻を、見ず知らずの人々にも想起させる場所として位置づけられることとなる。しかし先述のように、平和会館を中心とする「現在の知覧」は、「知覧の枠を超えて『特攻』全般が語られる空間（福間,山口2015：66）」となっている。具体的には、陸軍基地でありながら海軍の特攻機である零戦の残骸や義烈空挺体のパネルなどが展示されていたり、映画「俺は、君のためにこそ死にに行く」（新城卓監督：2007年）の記念碑が設置されていたりする点である。特攻に関することはすべて取り揃えている、いわば「特攻博物館」の様相を呈している。すなわち、「現在の知覧」と「1945年の知覧」とは、様々な点で異なった場所であり、安易に一貫性だけで理解すべきではないと考えられる。

では、このマス・メディアと知覧の関係をどのように理解すべきだろうか。示唆的なのは、Culdryの「メディア巡礼（media pilgrimage）」論である。メディア巡礼とは「メディアと関連する場所を旅すること（Culdry 2003：80）」を指し、メディアが意図して作り出した具体的な場所に来訪することで、映像だけでは気付かなかった細部を発見し感動したり、お気に入りの芸能人を想像しながら歩くことで非日常体験をしたりする。この概念は基本的にテレビのロケ地やセットなどを対象にしているが、知覧にも同様の構図を見て取ることが出来るのではないだろうか。すなわち知覧は、「俺は、君のためにこそ死にに行く」や「ホテル」（降旗康男監督：2001年）などのロケ地⁴であり、先述のドキュメンタリーや新聞記事などを通じた媒介現実

⁴ 「永遠の0」（山崎貴監督：2013年）のロケ地は茨城県の筑波海軍航空隊記念館であるが、この映画の効果で来場者数を大きく増やしている（毎日新聞 2014年6月19日朝刊）ため、本文中の映画の系統に追加することも出来る。

(mediated reality)によって構築された場所であるといえる。1945年の知覧と現在の知覧が大きく異なる様相を呈していたとしても、来訪者は現在の知覧こそが「知覧」であると認識したうえで来訪しており、メディアで描かれた「聖地」としての知覧を楽しんでいると見るべきではないだろうか。つまり、福岡が述べる「継承」と「忘却」という視点だけでなく、メディアと来訪者の期待を背負った「聖地」という視点から知覧を見つめ直す必要があるのではないだろうか。そして、「特攻博物館」となった平和会館に対して、マス・メディアは別の期待をかけていく。また、平和会館の側も様々な方法で、自らが「特攻」を代表する戦跡であることを世間にアピールしていくこととなる。

4. 知覧への期待と知覧の反応—特攻を「独占」する知覧—

「特攻博物館」と化している平和会館は、良くも悪くも特攻を網羅的に扱っているということが出来る。隊員の遺影や絶筆、手記には、知覧から出撃した隊員だけでなく、石垣（伊舎堂用久中佐）、沖縄（今西修少尉）、徳之島（清水定少尉）から出撃した隊員、さらにはすでに資料館が存在する鹿屋（東田一男大尉）、宜蘭（芦立孝郎少尉）、万世（久永正人少尉）から出撃した隊員など、知覧ではない場所から出撃した隊員のものも多数存在する。入ってすぐに眼前に現れるフッペルピアノに至っては、『月光の夏』（毛利恒之）というフィクションの作品の中に描かれているピアノと同型の物が寄贈されたため、それを館内に設置したというものである。すなわち、知覧と関係がないどころか、特攻との関係も、フィクションの内部でしか成立していないのである。また、先述のように海軍特攻機である零戦が展示され、熊本県の健軍飛行場から発進し、読谷飛行場を襲撃した義烈空挺体の解説なども行われている。平和会館内で行われる語り部の一人である川床剛士参事の講演も「命の尊さと親子の絆—特攻隊員の心に学ぶ—」といった、非常に大きなテーマを扱っている。すなわち、平和会館の内部には「知覧」との関係性を見出すことが難しい遺品や展示物も少なくない。このような構成は、一見するとマス・メディアが描き出していた、1945年に特攻が行われた「知覧」と、現在の「知覧」との連続性を阻害する要因かのように思われる。しかし、基本的にこの網羅性を批判しているマス・メディアは皆無である。むしろ、マス・メディアは特攻の歴史の「基準」としての役割も平和会館に求めているといえる。

平和会館の川床剛士参事へのインタビュー⁶の中で、川床参事は「マス・メディアの記者が8月15日になるとやってきて、『特攻に行きたくない』、『特攻は嫌だ』といった遺書や手紙が残っていないかを尋ねられるが、平和会館ではそのような遺書・手紙はお預かりしていないし、若しあるのであれば教えていただきたい」といった話をしている。また、共同通信鹿児島支局の坂手一角記者もインタビュー⁷の中で、「8月15日は知覧だけに取材に行く」と語っている。ここで重要なのは、参事や記者の発言の当否ではなく、記者たちが特攻の取材には知覧を使うという定式を受け入れている点である。その他にも特攻の戦跡や資料館は存在するものの、知覧にだけ取材に行くという傾向は共同通信に限った話ではない。例えば、鹿児島県の地方紙も平和会館に絶対の信頼を寄せている。南日本新聞の深野修司編集委員⁸は、「鹿児島では特攻の歴史が抹殺されてきた側面があり、知覧だけが特別に昔から特攻の歴史の維持や保存に注力してきた」ことを、インタビューの中で強調した。そのうえで、「特攻の話題のプラットフォームとして、知覧が果たす役割は大きい」としている。マス・メディアにとって、中に入れば知覧に限らず航空特攻に関する広範な情報や知識、実物に触れることが出来るという、平和会館の構成は大変有用性が高いのである。毎年8月15日になるとドラマなどが放映されたり、「永遠の0」に代表される様々な映画で登場するなど、ニュース・バリューが非常に高い航空特攻ではあるが、歴史の「基準」として積極的に取材をし、記事や番組にするに堪えるソースを提供するところは意外と少ない。その中でも、平和会館は突出して資料数が多く、かつ「特攻博物館」としての機能が色濃いため、取材先としても重要性が高くなる。

このような状況下で、平和会館の側も、自らが「特攻」を代表する戦跡であることを、内外にアピールしようとしており、積極的に自らのニュース・バリューを高め、注目度を集めるアクションを起こしている。具体的には、世界記憶遺産への登録申請、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所（以下、アウシュヴィッツ）が立地するオシフィエンチム市と南九州市との友好協定検討などが挙げられる。世界記憶遺産には、2015年、2017年の採択を目指して、二度の申請を行っており、アウシュヴィッツとの友好協定は、2015年9月の締結を目指していた。

⁵ 隊員の出撃地、氏名などは『魂魂の記録』による。

⁶ 2018年3月8日、知覧特攻平和会館内で行った。

⁷ 2018年3月7日、共同通信社鹿児島支局内で行ったインタビューによる。

⁸ 2018年3月7日、南日本新聞本社屋内食堂で行ったインタビューによる。

世界記憶遺産への登録申請は、平和会館に收藏される隊員の遺書など333点を対象に行われた。申請理由として、霜出勘平市長（当時）は「明日、命はないという極限の状況で隊員が残した真実の言葉を保存・継承し、世界に戦争の悲惨さを伝えたい」と話している⁹。この申請に関しては、「日本からの視点のみが説明されており、より多様な視点から世界的な重要性を説明することが望まれる¹⁰」と指摘がなされ、一回目は不採択となっている。再度挑戦したものの、結果的に二回目も不採択となった。この挑戦について、マス・メディアは「歴史を広い視野で多方面から見るとは、自分たちの見方を相対化することにもつながる。今、求められているのは、過去に対するそんな複眼的な見方なのではないだろうか¹¹」と、平和会館により多様な世界観を要求している。また、平和会館側も、二度目の挑戦を行っていることから、少なくとも不採択の要因である多様な視点を入れる努力を行った者と考えられる。すなわち、前述したようにここでも、マス・メディアや世界記憶遺産の選定委員から、自分たちの所有資料よりも広い視点を要求された平和会館は、それに応えようと努力したと見ることが出来る。

一方で、南九州市とオシフィエンチム市とは、知覧とアウシュヴィッツを通じて交流を図ろうとした。この交流は、特攻について世界に発信し、世界平和を願うことを目的とした連携とされた¹²。しかしこちらは、「国や家族を守るための特攻と民間人虐殺が同一視される」との批判が、特攻遺族を中心に全国から相次いでいたため¹³、計画断念となった。

世界記憶遺産も、ホロコーストの象徴であるアウシュヴィッツとの提携も、平和会館を中心とした知覧が、特攻戦跡の代表であると内外に知らしめることの出来る行動であるといえる。実際に、これらのニュースは全国紙でも報じられ、知覧の知名度を向上させるとともに、特攻の代表的戦跡が知覧であることを印象付けるのに十分な活動であったといえるのではない¹⁴。

現在では、特攻に関する史資料、知名度、観光客数などをほぼ独占している知覧と平和会館は、マス・メディアからの取材が集中することになり、より特攻に関する独占的な地位を占めていくこととなる。さらに、平和会館をはじめとした知覧の戦跡は、世界記憶遺産やアウシュヴィッツとの交流などのアクションを起こし、自らも特攻を全般的に包括する方向に進んでいる。すなわち、平和会館や知覧と、マス・メディアは相互に関係しあいながら、「特攻の記憶」を知覧に、より集中。増幅させる方向に進んでいると見做すことが出来る。現在でもなおニュース・バリューが高い航空特攻は、今後も知覧を中心に語り継がれることになっていくと考えられる。

5. まとめ

本研究では、マス・メディアが「知覧」を論じる際に、一方では1945年の特攻の面影を残している「知覧」を期待し、過去に思いを馳せる場と描き出しながらも、平和会館が「知覧」に独自の特攻体験をはるかに超える範囲で展示などを行っていることを批判できていない現状を浮き彫りにした。それは、平和会館がメディア巡礼の地として、メディアが作り上げたイメージを確認する場となっていることとも関連している。「特攻＝知覧」のイメージが構築されている中で、平和会館は航空特攻に関連する多様な史料や解説を内包しながら、「特攻博物館」としての機能を拡張させている。マス・メディアの記者にとっても、「知覧」が特攻を論じる際の「基準」として存在しており、航空特攻に関連する記事や番組を制作する場合、「知覧」に触れるという基本図式がしみ込んでいると見ることが出来るのではないだろうか。平和会館自身も、世界記憶遺産やアウシュヴィッツとの交流など、多様な方法で自らの地位を向上させるように努めており、「特攻＝知覧」の構図はマス・メディアからも、平和会館からも強化されていると見ることが出来る。

本研究は、あくまで知覧特攻平和会館を対象にして、マス・メディアの描き方と平和会館の反応を分析してきた。しかし、このように長い時間を経て、大きく変容を遂げた史跡は他にも存在するだろうし、ある歴史的出来事に関する史料や名声を独占している史跡も少なくないのではないだろうか。そういった観点からすると、マス・メディアのまなざしとメディア巡礼の地としての史跡との関係性について、その範囲を拡大していくことも重要になるだろう。知覧と平和会館が特殊な様相を呈しているのか、それとも他の史跡でも同様なことが起こっているのかに関しては、今後の研究課題としたい。

参考文献

⁹ 産経新聞,2014年2月4日,大阪夕刊.

¹⁰ 毎日新聞,2014年7月13日,朝刊.

¹¹ 同上.

¹² 朝日新聞,2015年7月17日,鹿児島朝刊.

¹³ 産経新聞,2015年7月28日,大阪夕刊.

- 1)知覧特攻平和会館(2016)：『魂魄の記録』,知覧特攻慰霊顕彰会.
- 2)Couldry,N.(2003)：*Media Rituals: A Critical Approach*,Routledge.
- 3)福間良明(2015)：『「戦跡」の戦後史—せめぎあう遺構とモニュメント—』,岩波現代全書.
- 4)福間良明,山口誠編(2015)：『「知覧」の誕生—特攻の記憶はいかに創られてきたのか—』,柏書房.
- 5)井上義和(2015)：「記憶の継承から遺志の継承へ—知覧巡礼の活入れ効果に着目して—」,『「知覧」の誕生』,pp.357-411.
- 6)井上義和(2017)：「感謝の発露と美化批判—ポスト戦後70年の対立軸—」,『戦争社会学研究1』,pp.34-50.
- 7)蘭信三(2017)：「『特攻による活入れ』という衝撃—『記憶の継承から遺志の継承へモデルの批判的検討』—」,『戦争社会学研究1』,pp.51-64.
- 8)佐藤早苗(2007)：『特攻の町 知覧—最前線基地を彩った日本人の生と死—』,光人社NF文庫.
- 9)高木俊朗(1965)：『知覧』,朝日新聞社.
- 10)山本昭宏(2015)：「〈平和の象徴〉になった特攻—一九八〇年代の知覧町における観光と平和—」,『「知覧」の誕生』,pp.74-100.
- 11)吉村和真(2015)：「コンビニエンスなマンガ体験としての『知覧』—『実録神風』のメディア力学—」,『「知覧」の誕生』,pp.323-356.
- 12)Zelizer,B.(2008)：“Whymemory’sworksonjournalismdoesnotreflectsjournalism’sworksonmemory”,*MemoryStudies*,1(1),pp79-87.